

---

# 朧気な月

浦ばんだ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

臃気な月

### 【Nコード】

N0464H

### 【作者名】

浦ばんだ

### 【あらすじ】

何度殴られても、何度蹴られても、あなたが忘れられないから。私が拒絶を口にしてしまえば、あなたは壊れてしまうから。だから、私は、あなたから与えられる暴力に耐える。どんなに苦しくても。

## 一回目 始まり(前書き)

この小説には気分を害するような表現がありません。閲覧時お気を付けてください。

## 一回目 始まり

どれだけ大切に出来るか、なんて、予測はつかないけど。

「う、……っ」

「ほら、立てよ

まだ動けんだろ」

空良そらはそう言っつて、倒れたままの海月くらげの横腹を蹴った。

どすっ、と鈍い音。

「っ……！！」

海月は声にならない声をあげて、腹を押さえた。

「え、何、もしかして痛いのか？」

痛い訳無いよな、だって痛くしてねえもん」

腹を押さえて蹲った海月を見下ろして、空良は笑いを含んだ声で言う。

「ほら、立てよ」

もう一度、腹を蹴る。

鈍い音と、短い呻き声。

「立てつつつてんだろ」

空良は笑うのを止め、声のトーンを低くして言う。

空良は舌打ちをして、それでも起きなかった海月の前髪を掴んで、空良は無理矢理海月を立たせた。

「い、た……っ」

「んだよ、聞こえねえよ」

ほら、はっきり言えよ」

「い、たい」

「……ふーん」

痛い、と言った海月が気に入らなかったのか、空良は膝蹴りを海月の腹に入れた。

「ぐ、う」

海月は苦しそうな声を出して、空良が髪を離したことで支えを失い、床に崩れ落ちた。

空良と海月はどちらも両親が居らず、一緒に暮らし始めてからは海月が家事を担当している。

ただ、海月は絶対に外に出られなかった。

しかし、海月はそんな空良のことを悪くは思っていないかった。

ただ、一つ難点があった。

空良はいわゆるヤンデレで、海月への気持ちを海月に暴力を振るうことで表現している。

だから、海月の身体は痣や生傷が絶えなかった。

しかし海月は外に出られないからそんなことは人目につかなかった。

逆に言えば、空良が外で自然に振る舞って居る為、空良が海月に対して振るっている暴力のことは誰も知らない。

知っていたとしても、誰にも言えない。

他の誰かに言ってしまうえば空良に殺されかねないから。

助けたいけど、自分の命が惜しい。

だから、知ったとしても、誰にも言わない。

それより、海月は助けを求めない。

求めたって無駄だから。

それに海月は空良の暴力が愛情表現だと分かっているから、それに耐えている。

どんなに苦しくても。

身体中を痣だらけにした海月は、家路へと急いでいた。

今日は特別に外に出ることを許されていた。

条件付きで。

「半日以上家に帰って来んなよ

絶対だからな」

「……………うん」

そして、半日経ち、海月は家に帰ろうとしている。

おぼつかない足取りで。

ひょこひょここと右足を引き摺りながら歩く様は痛々しかったが、端から見れば格好の獲物だったのだろう。

海月は、後ろからついてくる足音に耳を澄ませながら足を早めた。

後ろからの足音も早くなる。

かつかつかつかつかつかつかつかつかつかつ

「　　っ！！」

海月はあまり動かない右足に力を無理に入れ、走り出した。

ズキ、と足が痛む。

昨日蹴られた腹も、痛みが酷くなってきた。

曲がり角を曲がったところで、海月はあまりの痛さにうずくまってしまった。

足音は海月のすぐ後ろで止まった。

「海月」

海月はぼんやりとしてきた意識の中、聞き慣れた声がした方へ首を向けた。

「病院、行くぞ」

その影は、そう言って海月に手を伸ばした。

「そ、ら………？」

海月は意識が薄れていくのを感じながら、伸ばされた手を取った。

そして立とうとした。

しかし、海月の身体はぐらりと傾いて、空良に預ける形になった。



「空良、ごめ……」

「俺が悪いから。」

海月は謝んなくていい

ごめんな、海月」

海月の身体は宙に浮き、海月は意識を闇に落とした。

朝。

目が覚めて、一番に目に飛び込んだのは白い天井。

海月は痛む身体を宥めながら、身体を起こした。

横には空良が眠っていた。

海月が身動いだ時に起きた振動で目が覚めたのか、空良は目を半分開けた。

「起きたんだったら起こせばよかったのに……」

「気持ち良さそうに寝てる人を無下に起こせないよ」

「傷はどうだ」

結構中身ぼろぼろらしいけど、まだ痛いか？」

「ちよっとだけ痛い、よ………！？」

空良の顔をはつきりと見た海月はぎよっとした。

空良は泣いていた。

「俺が悪いんだよなあ……」

「そ、ら……?」

「海月、ごめん、な」

涙をぼろぼろとこぼしながら謝る空良に海月はどっぴう対応をすれば良いのか分からなかった。

「痛いって言ってもそんなに痛くないよ?」

「でも身体に傷、が」

女なのに、傷あった、ら」

空良は溢れている涙を無視して、話を続ける。

「ごめんな、本当にごめん」

空良はただ、謝る。

「……空良」

少しの沈黙の後、海月が口を開いた。

そして空良の目元に溜まっている涙を拭う。

「泣かなくていいよ。」

空良の愛情表現の仕方だもんね。

いいよ、これからも受け止めるから」

「その話、何だけど、さ」

空良は自分でも涙を拭った。

「もう、暴力、しないから」

「……………へ？」

「だから、海月の身体を綺麗なままにしたいから、さ  
もう、暴力しない。絶対に」

「空良は、いいの？」

「それでいいの？」

「もう決めた」

俺は海月しか相手にしない

別の意味で狂って愛す」

「狂うのは変わり無いんだね」

空良の真面目な申し出に、海月はくすくすと笑った。

「笑うなっば」

「ごめんね、でも、」

「うん？」

「絶対にもう暴力振るわない？」

「絶対。約束する」

そう言って、空良は小指を差し出した。

海月も空良と同じように小指を差し出す。

「指切り、ね」

「ん」

指、切った。

その後、海月は順調に回復し、無事に退院した。

傷痕は日が経つに連れて薄れていった。

そして、海月の身体に傷が増えることは無かった。

「（本当に暴力振るわないんだなあ）」

海月はリビングのソファに座ってくつろいでいる空良を見て思った。

本を顔に被せて眠っているフリをしていた空良は、自分から興味がそれた海月を本を少しずらしちらりとみた。

そして、にやり、と笑った。

悲劇はまだ、始まったばかりだ。

## 二回目 受信フォルダ

To:海月

『今何してる』

To:海月

『すぐにメール返して』

To:海月

『好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き』

海月は空良からの暴力が止んでから、携帯に空良からのメールが頻繁に届くようになった。

件名は無し。

添付ファイルも無し。

ただ、短い本文がちらちらと書いてある。

それが10分置きに来る。

しかし、人はすぐに慣れてしまつたもので、海月もすぐに慣れてしまった。

夜はメールが来ない。

当然の事だが。

受信フォルダはすぐに埋まって、古いものは消えていった。

海月には友人と呼べるものは居なかったから、空良からのメールは寧ろ嬉しかった。

ただ、空良は海月の今の状況を聞いても、自分の状況は絶対に海月に教えなかった。

それは二人の間に交わされた暗黙のルール。

破ってしまえば、その先に待っているものはBADENDだ。

こうして、もともと闇に居た二人は、尚更深い闇に堕ちていった。

くあ、と空良が欠伸をする。

その横には茶髪の女が居た。

「なあに、眠いのー？」

「……………」

「お姉さんの膝貸してあげようかー？」

「……………」

「シカトは悲しいよー？」

空良はその女からの言葉をスルーして、携帯を取り出した。

「なあに、彼女居んのー？」

「……………」

「居なかったらお姉さんがなったげるけど、どう？」

「……………あんたみたいな奴、趣味じゃないから」

「うわっ、ツンデレだ」

空良は隣で騒ぎ始めた女に向かって心の中で舌打ちした。

そして、海月に向かってメールを打ち始める。

「名前読めないんだけどさー、なんて読むの、これ

うみづき？」

「あんたには関係無いだろ」

しばらくの間を置いて、女が空良に声をかけた。

「お姉さんの好みのタイプだよ、君」

「俺はあんたみたいな奴、一番嫌いだから」

「お姉さんといいいことしない？」

「うざいから早く消えろ」

空良がすっぱりと切り捨てると、女は携帯を取り出した。

ばっじゃ

「……………何してんだ」

「写メ

君可愛いからさー

友達にもこんな子がいたぞーって自慢するために撮りましたー」

「撮ったら満足だろ

早く失せる」

空良が半ば怒り気味に言ってもその女は空良から離れなかった。

「きゃははははっ!!」

友達も可愛いって言ってるよー?

ホントにお姉さんといいいことしなくていいのー?」

甲高い笑い声を右耳にモロに受けながら、空良は小さく呟いた。

「うるせえ

あと香水臭い」

此処まで来ると、死亡フラグが立ってしまっ。

もうすでに立ってしまったのかも知れないが。

海月へのメールを送った空良は、未だ笑い続けている女の腕を引っ張った。

「そんなことよりいいことしてやるよ」

「え、何、いきなりやる気!?

君やるねー」。

きゃはははははっ!!」

この女の命はこの日を境にぷつぷつりと途絶えた。



ＴＯ：海月

『服に赤黒いシミがあっても気にすんなよ』

海月は、空良からのこのメールの意味が分からず首を傾げていたが、空良が気にするなと言っているのだから、何も言わないようにしよう、と小さく呟いた。

「（赤黒いシミがつくような場所ってなんだろう……？）」

海月は首をもう一度傾げ、空良に返信した。

ＴＯ：空良

『あんまり遅くならないでね』

海月は、何も知らない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0464h/>

---

朧気な月

2010年10月28日07時16分発行